AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:41～42.

初回アセスメントにおける新人看護師への指導の実際

貝谷沙織　三浦美佳　安田明日美　伊藤廣美

初回アセスメントにおける新人看護師への指導の実際

○貝谷沙織　三浦美佳　安田明日美　伊藤廣美
旭川医科大学病院　看護部教育担当

1. はじめに

A大学病院では、看護過程研修後フォローとして、専従の教育担当者（以下、教育担当者）による新人看護職員（以下、新人看護師）に対する OJT を実施している。新人看護師は「アセスメント」「看護診断」の指導ニーズが高いことが示された。[1)]研修後、研修で得た知識の実践に新人看護師は困難感を感じている。そこで今回、教育担当者の指導を振り返り、新人看護師に対する初回アセスメントの指導の実際を明らかにすることで、看護過程の OJT における指導の示唆を得たいと考えた。

2. 目的

新人看護師に対する初回アセスメントにおける教育担当者の指導の実際を明らかにする。

3. 方法

1) 対象：A大学病院の教育担当者1名
2) 指導方法：初回アセスメントを行う新人看護師1名にアセスメント（情報収集と情報の整理・分析）と診断仮説の検証を OJT で指導した。（1）データベース聴取前、新人看護師が得た事前情報からのアセスメントを導いた（2）データベース聴取に立ち会い、必要時、患者に直接聴取した（3）データベース聴取後、（1）と（2）からの新人看護師のアセスメントを導いた。
3) 指導時間：60 分
4) 指導内容の抽出と分析：（1）一事例の指導経過を「初回アセスメントの指導」用紙に教育担当者が記録した。（2）「初回アセスメントの指導」用紙と教育担当者からの聴取より、看護診断過程に基づき新人看護師の言動及び教育担当者の指導内容を研究者同士で抽出、分析した。
5) 倫理的配慮：教育担当者に同意を得て、得られたデータから教育担当者・患者・新人看護師の個人が特定されないよう、プライバシーの保護と情報管理を厳守した。

4. 結果

1) 新人看護師の言動と教育担当者の指導内容

(1) データベース聴取前

新人看護師の言動：①疾患や手術への不安、不安による体重減少や不眠の可能性②慢性疾患に対する服薬状況③飲酒習慣があり入院に伴う禁酒④術前スーフルの実施状況について確認したい。価値信念をどのように質問するかわからない。

指導内容：①不安は、手術の他に疾患告知から日が浅いため病気の受け止めとも関連させる②その上で、栄養、睡眠、コーピング・ストレス耐性など関連させ全体を把握する③質問は一連の流れで関連させる④不安の要因、手がかりとなる症状・徴候の確認⑤服薬状況、飲酒、スーフル実施は健康管理行動であり、根底には患者の価値観が関係している⑥価値信念は、服薬状況とその理由、家庭や仕事の役割を聴く際は「仕事は〇〇さんにとってどのような存在ですか」と問い、答えから判断する。

(2) データベース聴取時

新人看護師の言動：①「病気がわかって心配ですよね」「家族に同じ病気の方がいても自分のこととなると不安ですよね」と不安に関する質問を繰り返した②ヘルスプロモーションから関連付けて栄養、睡眠、コーピング・ストレス耐性を聞いた③仕事は内容のみ聞いて終わる。

指導内容：①不安の質問に対する患者の困った表情に気づかせるため「心配はしていない」という患者の言葉を教育担当者が繰り返した②「仕事の調整はされているようですが、仕事は〇〇さんにとってどんな存在ですか」と質問した。

(3) データベース聴取後

新人看護師の言動：①手術を受ける患者は不安があると考えていたが、不安はなかった②患者は服薬を続け禁酒してスーフルを励行し、

病気を良くして仕事を続けたいと考えている③仕事復帰に向け手術後に退院指導が必要なため、自己健康管理促進準備状態と診断する。

指導内容：①不安の定義、診断指標を文献を用いて患者に表れていないことを確認した②疾患と前向きに取り組み、退院後の職場復帰が目標であることが患者の強みである③術後の合併症について説明し、食事や仕事への影響について情報収集する④②③より術後、自己健康管理促進準備状態の診断仮説を検証した。

2) 教育担当者の指導内容からの分析

(1)データベース聴取前：新人看護師の不安の手がかりをもとに意図的な情報収集を事前準備していた。情報のもつ意味と情報間の関連性を説明し、全体的視点へのアセスメントを導いていた。患者に手がかりとした徴候・症状があるか知識に基づき説明していた。価値・信念は患者の考えや行動の基盤になるという教育担当者の看護観を反映させた情報収集の方法、開放型質問などを用いたコミュニケーション技法を指導していた。

(2)データベース聴取時：「繰り返し」というコミュニケーション技法を用いて患者の気持ちを表現していた。新人が聞けないと判断した場合、手がかりを裏づける情報を直接聴取していた。

(3)データベース聴取後：お互いの情報解釈を突き合わせ看護診断の知識を補足して、問題の根拠や要因を照合する診断仮説の検証をしていた。また、新人のアセスメント結果を受け、患者の強みを明確化していた。

5. 考察

教育担当者は、新人看護師が得た事前情報からのアセスメントを把握し、着目している情報を見極め手がかりとして認識させている。意図的な情報収集のためには、事前情報からのアセスメントの重要性を伝えていたと考える。さらに、新人看護師の手がかりをもとにデータベースの枠組みを活用し、全体的視点が持てるように具体的な質問内容の準備をしていたと考える。新人看護師が得にくいと思われる質問内容については、考え方と質問の流れを指導している。また、実際に行動に移すことができない場面では、教育担当者はロールモデルとなり、直接患者に質問している。これらは、教育担当者が患者を全体的に捉えるために重要な情報であることを新人看護師に認識させる行動であると考える。教育担当者は、新人看護師が患者に不安の質問を繰り返すのは、手がかりである不安を裏付けるための行動と判断したと推察できる。そのため、教育担当者は患者の言葉をそのまま繰り返すことで、患者の気持ちを新人看護師に伝え、患者と新人看護師の関係性を壊さないように配慮していたと考える。教育担当者は、新人看護師のアセスメント内容をもとに患者の強みを強調し、アセスメント結果と知識を結びつけている。これは、新人看護師のアセスメント内容を発展させて問題探しや表面的な判断にならないよう導いていたと考える。

これらの関わりは、新人看護師の手がかりを活かし、アセスメントを発展させる指導であり、特にデータベース聴取前の事前準備からの関わりの重要性が示唆された。

6. まとめ

新人看護師に対する初回アセスメントの指導の実際として、1)新人看護師の着目している事前情報からの手がかりの認識2)全体的視点が持てるように具体的な質問内容の準備とロールモデルを示す3)新人看護師のアセスメントを発展させるため、患者の強みの強調や新人看護師のアセスメントを知識と結びつける関わりが明らかになった。

7. 引用・参考文献

1) 植山さゆり　他：新卒者の看護過程における指導内容のニーズ, 看護診断, 14(2), 248-249, 2009